共生ニュース

ともしび

2022年3月　第5号

共生・探究学習委員会



長崎原爆資料館

修学旅行での平和学習

昨年の修学旅行でうかがった被爆者の方の「平和講話」の感想から、学年の先生にご推薦いただいた文章をご紹介します。

末永浩さんのお話を聞いて

H.A.（2年）

今回私がお話を聞いて、教科書や本で読むよりはるかにリアルに情景が想像できて、鳥肌が立った。末永さんは当時９歳、私たちの時代だったら、学校で勉強して、少しずつ自立して、友達と自由に遊べる年齢だ。そんな時期に戦争の状況が悪化しているからと、疎開をしなければいけない。空腹は水でごまかして、鬼畜米英と教えられ、学校では軍歌を歌う。子供たちは何を感じていたのだろう。

よく、原爆や災害は〝日常を一瞬にして奪う〟といわれる。末永さんの母、妹のお話は本当にその通りだった。アメリカの飛行機が見えて畑に伏せると青い光が降り注ぐ。数分すると押し寄せてくる火の玉と爆風。その数分の間、あたりはシーンとしていたという語りがより恐怖を感じさせた。防空壕に入れば安全というわけでもなくて、皆が身の危険を感じて集まったギリギリの空間だということだった。敵に見つかるから子供を泣かせるなと言われ、母は外にいなければならなかったという話は今にも通じるのではないかと思った。殺されるかもしれない恐怖とは比べられないけれど、震災の時、誰も余裕がなくて自分とその家族のことだけしか考えられない中で、つらい思いをした人がいたのではないか。

私の印象に残っているのは、目の前で炎や焼けただれた人を見なかった末永さんと弟には、真っ白い光と音を感じても何があったのかが分からなかったということ。終戦が玉音放送で国民に伝えられたと習った時、私は疑うことなく８月15日に全国民がその事実を知ったものだと思っていた。日本は神の国だから負けない、神風が吹くと信じていた当時の人々が、どんな思いでそれぞれ終戦を受け入れたのか、想像すると苦しくなる。

最後に末永さんが伝えて下さったのは、私たち若者がリアルを見る大切さだ。ほんの少しの間隔、歩いている距離で人生が変わってしまう。原爆の一番の怖さは放射能であるということ。テニヤンには爆弾を積んだ後の穴が残されているし、ウクライナには、サインをしないと入れない場所もある。進化していく現代、今の水素爆弾は原爆の1000倍もの威力がある。長崎や広島を通して、もう二度と起こしてはならないと伝えていかなければならない。今回の平和学習で、当時の悲惨さを身にしみて感じたし、現代を生きる日本人として、もっと知っておかなければいけないことだと強く感じた。

丸田和男さんのお話を聞いて

T.R.（2年）

私は被爆者の方のお話を聞くのは初めてだった。歴史的事実としてではなく、丸田さんの体験・経験を聞くことで原爆投下される前の長崎に合った日常を強く意識するようになった。

太平洋戦争のために、中学生の多くは学徒動員で、兵器工場で働き、若い先生は入隊して学校にいなかった。そんなことが当たり前になっていたことがまず普通ではないけれど、それでも日常が広がっていた。丸田さんが学校から帰っていつものように涼んでいる時に原爆が投下されたというお話からもその日常を感じた。丸田さんがその時「死を覚悟した」とおっしゃっていたことが印象に残っている。死を覚悟するなど、どういうことなのか私には想像もできない。原爆投下直後の様子について、今まで写真でしか見たことがなかったので、泣き叫ぶ声や「助けてくれ」という声を聞きながら人々は必死に山へ逃げていったことを初めて知った。ガラスが刺さり、血だらけの人が走っていく様子が目に浮かぶ。痛々しくて、目を背けたくなるが、丸田さんのお話から想像してきちんと向き合うことができた。

丸田さんのお話で一番衝撃を受けたのが、「長生きすればするほど胸の痛みが増す」ということだ。「空き缶」という小説を読んで、原爆から生存した人々の心の苦しみや、いつまでも原爆から離れることができないというのはわかっているつもりではいたが、本人の口から生きる方がつらい、苦しいと聞き、原爆がもたらした「被害」は街が壊滅したことや多くの人が死傷したことだけでなく、生き残った人々の人生までも壊したことだと思った。胸の痛みがあるから、丸田さんは語り手として活動を続けているのかもしれない。

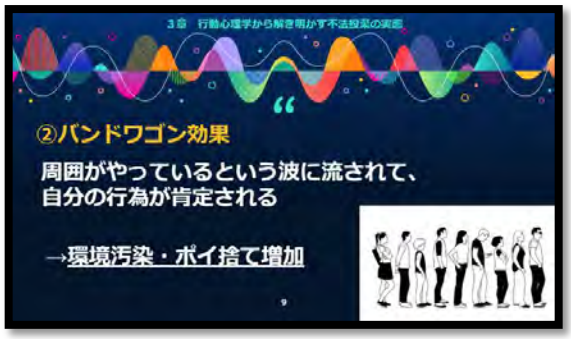
丸田さんは自分の体験を語って、同情してほしいわけではなく、二度と繰り返してほしくない、何かを学んでほしいと考えていると思う。私たちが生きている間に、被爆者の方が一人もいないという時代が来るだろう。それから、語り部の方のお話を聞いた私たちがどう行動するかがとても大切になってくる。未来で、広島・長崎の原爆が、長い歴史の中の一つの歴史的事実になってしまっては、また同じことが繰り返される。今日の貴重なお話を決して忘れず、語り継ぎたい。

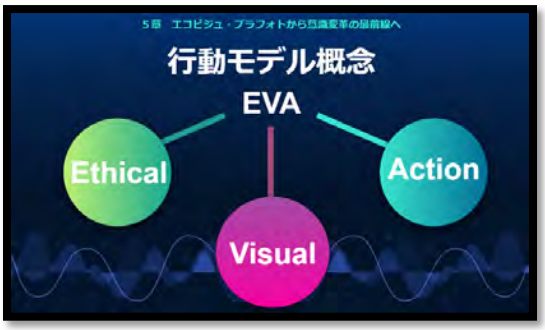
平和共生論文代表論文発表会

高等部で２年生の終わりに執筆する「平和共生論文」について知るため、２月24日（木）に２年生、３月 15 日（火）に１年生が、70 期クラス代表生徒の発表を聞きました。論文の内容はもちろん、論文執筆の技術についても有意義な話が聞けたと思います。 発表で実際に使用したスライドの一部を掲載します。

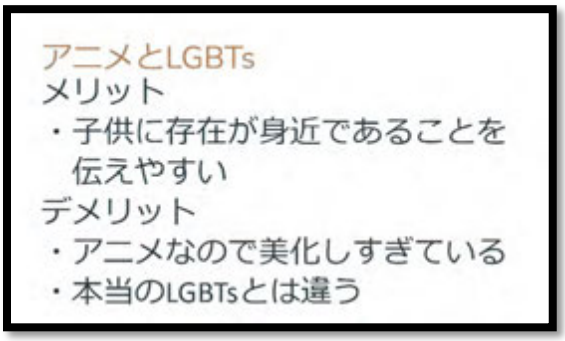
２年生向け発表会

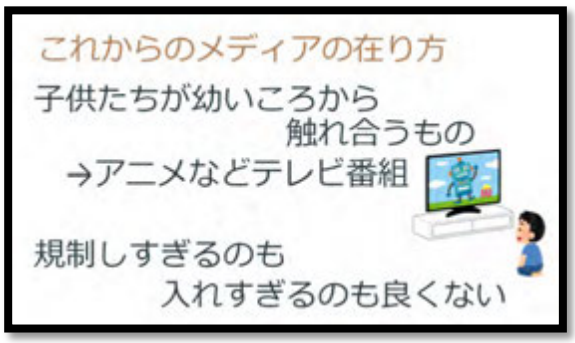
T.C. 「未来 100 年における廃棄物との共存 幸福✖ゴミを紐解く」





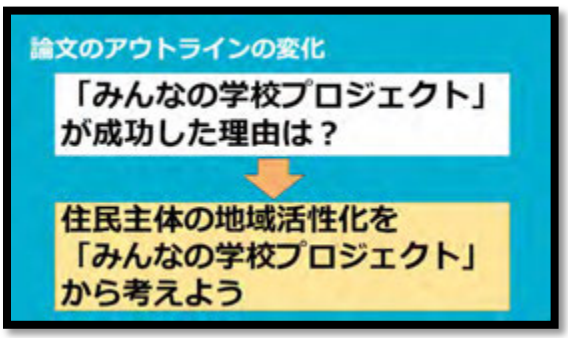
H.M. 「メディアの中の LGBTs ～適切な表現とは～」





Y.A. 「住民主体の地域活性化～「みんなの学校プロジェクト」成功への道のりを辿って～」





1年生向け発表会

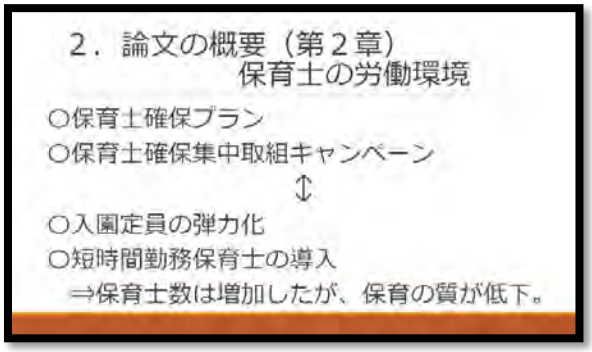
I.M.　「日本における児童虐待の今を見つめる」





S.A.　「保育士の労働環境からみる日本の保育課題
－待機児童解消と保育の質確保を両立させるために－」





M.F.　「難民の隣人になるために
－日本人の宗教的深層意識と難民受け入れ低迷の関係性－」

